

# 小さな世界

寺岡 なずな

大阪教育大学附属高等学校

自分が知っている人が、たまたま友達の知人だったとき言われる、お決まりの言葉。

『やっぱり小さな世界だね。』

この言葉に私は違和感ばかりを感じてしまう。毛嫌いしているとまで言えるかもしれません。兎に角、この言葉が快く受け入れられないんです。世界が「小さい」だなんて、なんとも夢がない話だと思いませんか？だって、世界って地球だけにとどまる話じゃない、私達が居る太陽系、銀河系、宇宙のすべて、それを総括して呼ぶ渾名は“世界”です。仮に、地球だけが世界の全てだったとしても、私達人間はまだそれすらも知り尽くせていない。一説によれば、まだ地球の65%以上は未探索状態だそうです。私達が知らないだけで、世界はもっと広い。そこには、ありとあらゆるもの、想像できるモノすべて、そしてどれだけ頭を捻っても出てこないようなモノまで、人間の目の届かないところに潜んでいるはずですよ。そして、そのままが良いのです。

私にとっての“世界”は得体のしれない生き物。世界そのものが生命体であり、それ自体が半永久的に広がり続けている。私が認識している世界が広がるたびに、非認識の部分がどこかが増えているんじゃないかと思う。じゃなけりゃ、いつか追いついてしまうじゃないですか。けど、そんなことありえないでしょ。そんな仙人みたいな人が居てはたまったものじゃないです。

“世界”は気まぐれ、まともに太刀打ちしてみようものなら、こっちを平気に潰すこともできる。そんな生き物です。だから、あがけばあがく程、どうしようもない無力感に駆られる。それもまた、ここで生きていくことの醍醐味だとは思っていますが。

世界が「小さい」だの、「狭い」だの、簡単に口走ってしまう人は自分が認識している範囲を、シャボン玉のように囲ってしまっているのかもしれない。もしくは、昔のアーケードゲームのようなものだと思うのかもしれない。一つの端から出れば、もう一方の端からまた同じ空間に入ってしまう、終わりのない箱のようなものだと。

実を言えば、自分が知っている人がたまたま知人の友人であることは、どれだけ世界が広すぎて、そしてどれだけ私がちっぽけ過ぎるのかを物語っているというのに。私達はちっぽけすぎて、気づかぬうちに人とのつながりを循環させてしまっているのです。もし、世界が本当に小さいのであれば、嫌でもこの循環に気がついてしまいます。そして、それに驚くこともない。ああ、なんとも退屈な場所でしょうか。

他にも、自分の考えが強い人に対して言う言葉に『自分の世界がある』があります。つまりは、この世界に当てはまらない、別のどこかに生きていたいんじゃないでしょうか、これもまた私にとっては違和感しかない。

だって、この世界に無くて、一人の人間にしか存在しないものなんてあるはずがないじゃないですか。人が少しずいからといって、排除しようという思考が見え透けていて、まったくつまらないと感じてしまう。どれだけのものを排除したところで、人智を超えてものは何億と存在するのだから、いつまでも劣等感を感じるし、虚無感は蔓ります。じゃあその人がもつ“セカイ”も、結局は同じ自分が生きる“世界”なのだと考えるほうが自然だし、楽しい。

いいですか？私が考えること、あなたが考えること、この文章、あそこの机、犬、ジャマイカ、ベトナム、火星、天の川銀河、それ全部世界の一部にすぎないんです。そして、それら全部が組み合わさって初めて世界になります。だから世界が決して「小さい」なんてことはない。世界は常に広く、大きく、無限大で、わかり得ない、そんなものです。

ま、この考えも、世界のほんの一部、たったの何不可思議分の一にすぎないんだけどね。